

旦那様は
大変忙しいお方なのです

◆ — ◆
あねもね
Anemone

Regina
BUNKO

オーランド

サルヴェール侯爵家に
仕える侍従長。
有能だが周囲には
事務的に接する。

ニコラス

レオナルドの
唯一の部下。
膨大な仕事に
よく文句を
言っている。

ルミン

レオナルドの従兄弟で、
遊び人の放蕩息子。

レオナルド

サルヴェール侯爵家現当主。
良くも悪くも仕事一筋で、
四六時中仕事をしている。

テレシア

サルヴェール
侯爵家に
仕える侍女長。
貫禄と威厳がある。

アンヌ

サルヴェール
侯爵家に仕える、
リゼット付きの侍女。
ノリが良い。

リゼット

政略結婚でサルヴェール
侯爵に嫁いだ令嬢。
大人しそうな外見とは裏腹に、
かなり芯が強く負けず嫌い。
手芸が得意。

登場人物紹介

目次

旦那様は大変忙しいお方なのです

7

書き下ろし番外編

あなたのことをもっと知りたい

363

旦那様は大変忙しいお方なのです

「旦那様は大変忙しいお方なのです」

サルヴェール家の侍従長、オーランドさんはそうおっしゃいました。

そうでしょう。

旦那様は王家に信頼を置かれている貴族、サルヴェール侯爵卿なのですから。

サルヴェール家から王家に迎えられた女性その他に、サルヴェール家へと降嫁した王女もいらつしやる、という血族的にも王家に近い高位貴族なのですから。

サルヴェール侯爵が陛下やご年齢の近い王太子殿下のご相談に乗られている、というお話も伺っております。それは理解しております。

ですから結婚式が華やかなものではなく、当人たちだけの略式化されたものなのも理解しておりますし、不満を申し上げるつもりありません。

私たちの間には恋も愛も——いえ、それどころか一度お会いしたきりで信頼関係もなく、互いの利害が一致した単なる政略結婚だというのも重々理解しております。

子爵とは名ばかりの没落貴族の私どもといたしましては、この結婚によってたくさん
の支援金をサルヴェール侯爵家から頂くことになり、そのことに関しましては心より感謝いたしております。

二人の間に恋は無い。愛は無い。信頼関係は無い。

政略結婚？　こちらら痩せても枯れても貴族の娘です。自分の立場はきちんと理解しております。不満などございません。大いに結構。政略結婚、むしろどんと来い！

——ですが。

ですが、その結婚式に旦那様ご本人がいらしていないのは、さすがに……理解に苦しみます。

今生では着ることはないだろうと思われた、品質がよくて美しい真っ白なドレスに身を包み、古い歴史のある広い教会で立派な聖職者様の前に一人ぼつんと立つ姿は、第三者から見たら滑稽すぎるのです。

ドレスが豪華であればあるほど、教会が格式高い場所であればあるほど、式直前に新郎に逃げられた哀れな新婦の姿として際立ちます。

幸いにもそれを目撃する第三者すらおらず、今この場に居るのは私と聖職者様……そしてサルヴェール家の侍従長であるオーランドさんだけです。

格調の高い造形の柱も、色とりどりのステンドグラスから入る太陽の光も、入り口まで長く続く木目が美しい会衆席も、招待客が一人もないせいで虚しさを強く演出してくれます。

いえ。もしやここは、私に恥をかかさぬよう招待客を呼ばずにいてくださって、過分なご温情を賜り痛み入ります、と旦那様に感謝の念をお伝えすべきところなのでしょうか。非常に悩みます。

「あ、あの。ええっと。ご新郎様不在のままでも式を執り行うのでしょうか」

聖職者様、私を見ないでください。答えられません。

私としましても、旦那様ご不在の中の結婚式というお話は一切伺っていないのです。初めてのご経験のようでも聖職者様も相当お困りのご様子ですけれど、私のほうが精神的打撃は大きいでしょう。

突然のことに呆然として居る部分もありますが、叫ばず、泣かず、暴れ出さず、逃げ出さず、この場に大人しく立っているだけでも何と偉いことか、と自分で自分を褒めたいと思うのです。

まあ、あまりにも奇怪な出来事すぎて感情すら追いついていない、というのが正しいのかもしれません。

私がぼんやり立ち尽くすばかりで何も答えない人形のように頑なに口を閉ざすので——いえ、答えられないものですから、聖職者様は同情の視線を向けてくださいました。

その後、私の側にいる、答えを出してくれそうなオーランドさんに視線を移して確認されました。

「はい。旦那様のご意向です。ご進行のほどよろしくお願いいたします」

私はオーランドさんの顔を改めて見ましたが、彼は澄まし顔で平然とのたまいました。オーランドさんはサルヴェール家の侍従長だけあって、貫禄のある落ち着いた初老の男性です。髪色と同じはしばみ色の目は、私と聖職者様の動揺をよそに冷たさすら感じるほど感情を見せずにいます。

「そ、そうですか。では」

そんなオーランドさんを目にされたからでしょうか。聖職者様はコホンと咳払いを一つして動揺から抜け出し、職務を全うしようとしております。そんなお姿に敬愛の念を抱くほどです。

「新郎レオナルド・サルヴェール、あなたはリゼット・クレージュを妻とし、健やかなる時も、病める時も、喜びの時も、悲しみの時も、共に分かち合い支え合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」

視線は虚ろに宙を見ていらつしやるけれど、最後まで乱れることなく言い切られたお姿は実に立派でございました。さあ皆の者よ、拍手喝采せよ。

心の中にのみ存在する招待客に言ってみると、拍手と共に歓声まで起こり、盛り上がりました。めでたしめでたし。

……さて。

虚しい逃避から戻ってきたのはいいのですが、現実は一層厳しく、沈黙が続いている状態です。誓いの言葉はどうするのでしょうか。私が代わりにお答えするのでしょうか。

何も打ち合わせしていなかったのだから黙って様子見していたら、オーランドさんが洗練された仕草で胸元から何やら取り出して広げました。

「旦那様から言付けことづけをお預かりしております。『すべて誓う』——とのことですよ」

旦那様のものと思われる署名が入っている書面をこちらに見せるオーランドさんに、私と聖職者様は再び呆氣に取られてしまいました。

ですが、悲しいことに徐々に慣れてきてしまった私たちは、立ち直るのも早くなり

ます。

というか、そのような書面で済ませるぐらいならば、いつそ式すら挙げないほうが清々しかったのではないのでしょうか。あるいは花嫁に対するこの処遇は、サルヴェール家に入るための試練の一つとされているのでしょうか。だとしたら、私はそれに応えるしかないのでしょうかね。

「それでは新婦リゼット・クレージュ」

「あ、はい。誓います」

気を取り直した聖職者様の声に、私は反射的に答えます。

旦那様が誓うと書面で示し、それを無効にできる権限が私にはない以上、当然、私が誓いませんとすることはできないでしょう。

「あ、あなたは新郎レオナルド・サルヴェールを」

「はい誓います」

「お、夫とし」

「はい誓います」

言葉を遮って答える私に対して聖職者様は口元を引きつらせておられますが、内容は同じですし、繰り返して時間を引き延ばす必要も、この茶番劇を長引かせて傷を深くす

る自虐趣味ありません。

少しでも早く終わらせたかった私もまた、引きつった笑顔を聖職者様に見せました。



「旦那様は大変忙しいお方なのです」

サルヴェール家の侍従長、オーランドさんはそうおっしゃいました。

そうでしょう。

旦那様は数年前に引退されたお父様に代わり、日々お仕事に奮闘されているそうなのですから。

侯爵位を引き継いだだけの若造が、と長年王家に仕える貴族の中には疎ましく思っている方々もいるでしょう。祖先より引き継いだ権力ではなく、自分の力を周囲に見せて認めてもらう必要があるのだと思います。それは理解しております。

ですが。

ですが、実家とは桁違いの大きな浴室で湯浴みを終え、着たこともない上質で滑らか

な寝衣に身を包み、サルヴェール侯爵家で私付きとされた侍女、アンヌさんに髪も丁寧にとかしてもらって、いざ夜に向けて緊張でガチガチになりながら、実家の倍はあろうかという大きなベッドにて待機していた私に向けるお言葉として、果たしてそれは正しいのでしょうか。

今いる寝室から繋がる扉は、廊下への扉と自分の居室への扉、そして旦那様の部屋に繋がる扉の計三カ所ありますが、どの扉もノック音はおろか、ぴくりと微振動する気配すらありません。

せめて本日、結婚式を欠席されたことへの謝罪、もしくは十歩、いや百歩譲って労いのお言葉ぐらい頂いても罰は当たらないと思うのですが。

色んな感情と言葉を呑み込む私の横で、旦那様の帰宅時間を尋ねるためにオーランドさんと呼んでくれたアンヌさんは静かに控えています。

このサルヴェール家に仕える者の特徴なのでしょう。仕事は早くて確実なのですが、感情の起伏がほとんど見られません。オーランドさんもそうですし、もしやこの屋敷の採用条件の一つに『表情筋が死んだ者に限る』というのがあるのでしょうか。

失礼なことを考えてしまいます。

「ですが、結こ——昼間もお目にかかれませんでしたし、何とかご挨拶だけでもさせて

いただければと思います。いつお帰りになるのでしょうか。それまで起きてお待ちいたします」

オーランドさんは感情のこもっていない視線を私に向けます。

「リゼット様。旦那様は大変忙しいお方なのです。不規則のため、お帰りのお時間をお伝えることはできません。どうかご理解くださいませ」

まるで駄々をこねる子供をたしなめるかのようにおっしゃるのですね。私はそんなに我儘なことを申しているのでしょうか。

しかし私も大人の女性です。ここに嫁いできたばかりの身で、新参者としての立場をわきまえています。

今はこの家の事情を何も知りませんし、旦那様が普段どのような生活を送っていらっしゃるのとも知りません。旦那様のことや家のことをよくご存じの侍従長さんが忙しい旦那様のことを理解しろとおっしゃっているのに、理解いたしかねますと言えるでしょうか。言えませぬ。

私は小さく頷きます。

「……承知いたしました」

「ご理解いただき、ありがとうございます。それでは失礼させていただきます」

慇懃無礼な挨拶を残してオーランドさんは去り、同時にアンヌさんも「お休みなさいませ」と必要以上の言葉は残さず、しずしずと礼をとった後、退室しました。

初めてこの屋敷に足を踏み入れて不安を覚えていた者に対して、お二人ともそっけないものです。

「明日にはお会いできるかしら。でも正直……」

正直、ほっとしました。一度しかお会いしていない方と本日、夜を共にしなければならぬのかと思うと怖かったのだ。

旦那様が結婚の申し込みで我が子爵家へご来訪された時に一度だけお目にかかったことがあります、茶色があった金の髪色に、影を落とした湖畔のような青色の瞳の美しい方でした。——だったと思います。誰もが振り返るような美しい容姿だと前評判を伺っていましたが、想像以上に容姿端麗なお方で、恥ずかしくてほとんど視線を合わせることができなかったのですから。

緊張と恥ずかしさで心が浮ついてしまつて、その時お話しされていたこともほとんど記憶にないですが、低く淡々とした冷たい声だったと、今ならそんな気がします。

旦那様がお帰りになった後に、なぜ我が家にこのような光栄なお話が舞い込んだのかと父に尋ねたところ、社交パーティーで私を見初めてくださったとのことでした。

美しく華やかに着飾った貴婦人が大勢いる社交場で、地味で目立たず、壁とお友達のようにお見初めになるわけがないと思い、さらに詰め寄ってみますと、やはり真相は違ったようでした。

「レオナルド様は侯爵位であり、王家の方々も絶対な信頼を置くとても優秀なお方で、容姿もあの通り端麗で引く手数多だ。だが、レオナルド様はまだ二十歳半ばとお若く、王家の周りにいる大臣の中には、位は高けれど身を固めぬ若輩者に大きな仕事を任せるわけにはいかぬ、と煙たがる頑固親父が多いんだ」

もちろんそこには、『生まれがたまたま侯爵家にすぎない七光りの若造が』という個人的な嫉妬も含まれるでしょう。さらに眉目秀麗で女性からの人気が高いところも鼻につくのもかもしれません。

「また一方で、自分の娘と結婚させようと媚びてくる者も頻繁にあると言う。そう言った煩わしさもあり、身を固める決意をなさったのだと思う。そこで嫁選びとなるわけだ」

私が真実をおっしゃってくださいと、じとりとした目つきで見つめるものだから、父は気まずそうに頬を掻いて先を続けました。

「社交場でまとわりついてくる着飾ったご令嬢はお美しくはあるが、気位が高く、少し

でも蔑ろにするようなことがあれば、たちまち機嫌を損ねるであろうことは想像に難くない。レオナルド様はご自分が若輩者だと自覚なさっており、現在、人一倍精力的に動かれている大変お忙しい方だ。一番大事な今の時期に、妻のご機嫌取りで煩わされるようなことにはなりたくない。……そういうわけだろう。だから、その」

そこで身分差に気が引けて高位のお貴族様方には一切近づかず、壁の花になっていた私に目をつけたということなのでしょう。つまり主人に文句一言わず、従順で大人しいお飾りの妻が欲しいということでしたか、なるほど。

「わたくしどもも、見返りとしてサルヴェール侯爵家からのご援助を頂くことができるのですね」

私の家にはまだ幼い弟や妹たちがいます。贅沢とは言わなくても、彼らがこれから先、苦労せずに伸び伸びと生きられるだけの環境を整えてあげたいと思います。

「そ、そうなんだ、うん。……お前一人に重荷を背負わせてしまつてすまない。私が不甲斐ないばかりに」

「いいえ。お父様、違います。わたくしは自ら望んでサルヴェール家に嫁ぐのです」
「リゼット、ありがとう」

肩を落とすお父様に、私は胸を張って笑顔を向けました。

……と。

私も事前にそのようなお話は聞かされており、覚悟した上での結婚ではありませんが。「それでも初日からこの扱いはあんまりだと思うのですが」
私は大きいため息をつきました。



「旦那様は大変忙しいお方なのです」

サルヴェール家の侍従長、オーランドさんはそうおっしゃいました。

朝、慣れぬベッドで目覚めた後に視界に入った光景は、やはり見慣れぬ高い天井でした。

幸いにも意外と自分の神経は図太かったようで、慣れぬ高級ベッドで慣れぬ肌触りの良いシーツに包まれても眠れないということはなかったようです。むしろ旦那様不在の結婚式に気疲れした後、初夜を迎えることもなくホッとした気持ちもあつたせいなのか、意識を失うようにすぐ眠った気がします。

状況を冷静に分析した私は、人の気配は感じられないながら寝返りを打って横を見てみました。思った通り、やはり見慣れぬ人物はそこにいませんでした。

シーツに手を置いてみたところ温もりはなく、乱れもなかったので、昨夜、旦那様はここで休みではなかったのかも知れません。あるいは私が遅く起きすぎってしまったということも……

せめて朝食は一緒にできるかと侍女のアンヌさんがやってくる前に慌てて着替えて、昨日ご案内いただいていた食堂へと向かったわけですが、旦那様はすでにお食事は済ませて職場へと向かわれたようで、オーランドさんからはお決まりのお言葉を頂きました。「そうでしたか。旦那様のお見送りもせず、大変失礼いたしました。明日からはもっと早く起床いたします」

朝は弱いですが頑張りたいと思います。

「いいえ。旦那様はいつも朝がお早いので、リゼット様はごゆっくりお休みいただきたい構いません」

旦那様が朝早くお出かけになり、夜遅くお戻りになるのに、そんな旦那様を支えるべき妻が朝も夜も呑気にグーグー寝ているのはいかがなものでしょうか。ですが、私がこの家に入ったことで、これまでの旦那様の生活習慣に乱れが生じてしまうことも懸念さ

れます。しばらくは様子を見ることにして、ここは大人しく引くことにしましょう。

「それでは、これからのわたくしの役割や家のしきたり、こちらに頻繁にいらっしゃるお客様の芳名などをご教示いただけませんか」

実際のところ、お名前だけでは来訪された時、お顔とすぐに一致はしないでしょうが、どんな身分の方なのか、どんなご職業の方なのか、旦那様とのご関係はどれほどの深さなのかなど、頭に入れておくことがたくさんあるでしょう。

しきたりも家それぞれです。我が子爵家では気楽にやっていたことも、この格式ある侯爵家では許されないということも多々あるかと思えます。それらを学ばなければ。

「いいえ。必要ございません。旦那様からはリゼット様にご無理をさせぬよう言付かっております」

「ご、ご無理、ですか？」

政略結婚とはいえこの屋敷に足を踏み入れた以上、旦那様が不在の時には女主人として務めを果たすものと自覚しておりますし、侯爵家という高位貴族の一員となる覚悟も少しは持っております。それなのに必要ないとは、一体どういうことでしょうか。

ただ、私も馬鹿ではありません。

好意的な気持ちで甘やかしてくれているわけではないことだけは分かります。さすが

にここは引くわけには参りません。

それともサルヴェール侯爵家では女主人としてまずやるべき重要な他のお仕事があるというのでしょうか。

「ではわたくしは何をすればよろしいのでしょうか」

「ご案内いたします」

なるほど。やはり私がサルヴェール侯爵家の女主人としてすべき重要なことが他にあったようです。

気が急いでいた自分を反省しながら、先導して下さるオーランドさんの後ろをついていくと、一つの部屋に到着しました。

昨日はこのお部屋の説明はなかったはず。

何のお部屋だろうと首を傾げていると、彼はおもむろに扉を開けました。

「こちらは……一体？」

リネン室かと思われたそこには、ひと目で高級と分かる素材の生地や毛糸などが雑然と山積みされています。他にも木箱が複数、棚に置かれているのが見えます。

もしやこれを整理整頓しろということでしょうか。与えられた仕事に文句を言うつもりはありませんが、女主人がすることではないような気がします。

「旦那様をご用意した生地と裁縫道具です。ご自由にお使いください」
 「ご自由にお使いくださいとは、一体どういうことでしょうか」

もちろん言葉の意味は分かりますが、意図が分からず、戸惑いを隠せないまま尋ねます。

「手芸が趣味だとお聞きした旦那様が、リゼット様のためにとご用意くださいました。お好きなだけお使いいただいて構いません。何か足りないものがあれば、私に言ってくださればご用意いたします」

今度こそ言葉を失ってしまいました。

確かに手芸は嗜^{おしな}みます。はつきり言って好きです。得意です。

とはいえ、それは貴族の娘が花嫁修業の一環として行うものであり、妻となり女主人となった者が、手芸だけをして一日を過ごしていい、というものではないはず。

つまり旦那様がおっしゃるには、私は女主人としての仕事は何一つしてくれなくていい、むしろ何もしてくれるな、ただ黙って手芸をしていろ……と、そういうことなのですね。

今、私が女主人としての仕事をさせてほしいとオーランドさんに頼んだところで、旦那様の忠実な侍従である彼は私に何もさせてくれないでしょう。

「……ありがとうございます。承知いたしました」

旦那様と顔を合わせてお話をしなければ。

私はぐっと手を握りました。



「旦那様は大変忙しいお方なのです」

サルヴェール家の侍従長、オーランドさんはそうおっしゃいました。

手芸用品を揃えてくださった旦那様にお礼を伝えたい、とオーランドさんに言った時のことです。夕食の時間がやってきて、食事を開始するよう促されたため今日も一人で済ませましたが、さすがに今日は旦那様とお話してできる時間はないのではないうか。

しかしオーランドさんの返答は、相変わらず同じ言葉を繰り返すのみです。

旦那様は屋敷にお戻りになってはいるようですが、会う時間を作ろうと思えば作れるはず。私はそれを望んでいますし、オーランドさんもその旨を伝えてくださってい

るはず。……伝えていないかもしれませんが。

それなのにその時間さえ割こうとしないのは、酷くお疲れだからでしょうか。

——いいえ。きつとお飾りの妻に愛嬌を振りまく必要はない、会う必要はない。何より会いたくないというお考えでいらっしゃるのでしょうか。

妻に時間と物だけ与えていれば大人しくするだろう、とお考えの旦那様。お決まりの言葉を繰り返して、与えられた仕事を淡々とこなすだけの使用人たち。

外側のみ綺麗に整えられているだけの温もりが感じられない、この家そのもののようでした。



「旦那様は大変忙しいお方なのです」

サルヴェール家の侍従長、オーランドさんはそうおっしゃいました。

私はため息をつく、こめかみを指でマッサージします。

サルヴェール家に妻としてやってきて四日目となりますが、いまだに旦那様とお会い

できておりません。私のしていることと言えば、ただ黙って手芸で時間を潰すのみです。

あれほど好きだったのに、時間を潰すためだけの趣味はもはや趣味ではなく、苦痛すら感じ始めています。

外に出ることは禁じられてはいませんが、まるで部屋に一人閉じ込められている気分です。

「お茶はいかがでしょうか、リゼット様」

「ありがとうございます。頂きます」

刺繍していた手を止めてお茶を頂くことにしました。

相変わらず感情の色がないアンヌさんですが、よくよく観察していると気遣いが端々に窺われ、決して無感情というわけでも、義務的に嫌々やっているわけでもないのだと感じます。

……読み違えている可能性も否定できませんが、とりあえず自分の見る目を信じて、少し会話に挑戦してみたいと思います。

「アンヌさん。少しお尋ねしたいことがあります」

「はい」

立ったままでは何ですからお座りになってくださいとお伝えしたのですが、アンヌさ

んに頑なに断られてしまいました。

実家では使用人の方々とお茶を一緒にすることも頻繁にありましたが、このサルヴェール家ではその辺りの線引きは厳しいのかもしれない。オーランドさんなど、いかにも厳しそうですね。

女主人としての命令よ、などと言えるほどの自信も当然ありませんので、私は彼女を見上げながら尋ねることにしました。

「旦那様のことですが。もしかして旦那様は未確認生物なのでしょうか」

「……………は」

淡々と仕事に徹していたアンヌさんの顔は、さらに無表情になってしまいました。

「え、あの。何と」

「未確認生物です。もし目撃したら三日以内に幸せをもたらすと伝承される精霊とか、目撃例があるのに誰も捕まえたことがない賞金がかかっている幻の生物などのことです」

——ブホッ。

「今、笑いました？」

「イエ」

目元は変わりありませんが、口元が歪んで噴き出したように見えました。しかしアンヌさんは首を振って否定します。

そうですかと私はお茶を一口頂きました。

「とても美味しいわ。アンヌさんはお茶を淹れるのがお上手なのですね。こう言っては失礼だけれど、食事の時に出来るお茶よりも美味しい気がします」

普段の食事は慣れぬ場所で、しかも侍女さんたちに自分の一挙一動を見張られているかのような状態で食べているから、余計そのように感じるのかもしれないです。とても息苦しいですし、お料理はもちろん口にしたこともないような豪華さで美味しいのですが、せっかくの美味しさが感じられません。

一人が寂しくて里心がついているせいかもしれませんが、豪華ではなくても家族皆でテーブルを囲んで食事をするほうが数段美味しかったように思います。

このお茶は彼女が私のためだけに淹れてくれているからなのか、思いを込めてくれているからなのか、側にいてくれるからなのか分かりませんが、とても美味しく感じられます。

「……………ありがとうございます」

本心をお伝えただけでそれ以外の意図はなかったのだけれど、彼女は少し微笑んで

くぐさいました。

その笑顔で私も気持ちがあはれます。

「アンヌさんはサルヴェール家にお仕えになって何年になりますか？」

「六年になります」

アンヌさんはくつきりとした黒い目を持ち、真つすぐの黒髪を顎までの長さで揃えた綺麗な方です。さらにお尋ねすると、私よりも二つ上の二十一歳とのことです。

容貌と同じく、とても落ち着いた方ですね。私もあと二年も経てばこのように落ち着くのでしょうか。あるいはこのサルヴェール家の空気に感化されてしまうのでしょうか。だとしたら……すみません。素直に嫌だなと思います。

「アンヌさんは旦那様のお顔をご覧になったことがありますか？」

六年もいらつしやれば当然あるでしょうが、思わずそんな尋ね方をしてしまいました。

「はい。ありますが、私ども使用人の間でも……」

「何でしょうか。何でもおっしゃって」

アンヌさんがはつと表情を変えて途中で話を止めるので、私は身を乗り出して促しました。彼女たちの本音を聞きたいのです。

彼女は一瞬ためらった後、口を開きました。

「私ども使用人の間でも旦那様をお見かけした人間は少なく、目撃した日にはラッキーなことが起こるというジンクスを流行^{はや}らせています」

「まあ！ そうなのですね。やはり旦那様は珍獣だったのですね」

六年勤める彼女ですらほとんど会えていないのだから、三日しか経っていない私が会えるはずはないのだと納得したわけですが、彼女はまたブホッと噴き出します。

ただ、今度は隠しきれないと感じたようで、失礼いたしましたと謝罪されました。それにしても流行らせているだなんて。

お澄まし顔の侍女さんばかりだと思っていましたが、実は遊び心がある方々なのでしようか。

「いいえ。わたくしが変なことを申したものですから。——あ。お詫びと言っては何ですが、よろしければわたくしが刺繍したハンカチをもらってくださいますか。お好きな柄をお取りください。素人が作ったものですが」

私はここ三日間で仕上げた刺繍入りのハンカチを並べます。

数にして二、三十枚はあるかと思えます。花柄が一般的ですが、果物や、鳥などの動物を刺繍しているものもあります。

「え……。いえ、とても素敵です」

アンヌさんは戸惑った表情を浮かべます。

「ですが、これらは旦那様をご用意された高級品では」

「ええ。生地や糸などの材料は確かにそうですが、わたくしに、と用意してくださいましたものですから、それをどう扱おうとわたくしの自由のはずです。それこそ捨てようが、燃やそうが気になさらないと思います。いえ、お気付きにすらならないでしょう」

私の言葉にアンヌさんは驚いた表情をしました。

あまりにもきつぱり言いすぎたでしょうか。ですが、これからここでお世話になるのです。素の自分を見ていただきたいと思います。

ですからどうぞ、と私は笑顔向けました。

「あり、ありがとうございます。ではこれを」

彼女は遠慮がちに黄色いミモザの花が刺繍されたハンカチを取りました。

「一枚だけですか？ もっと持っていてくださって構いませんよ。あってもチェストの奥に仕舞われるだけですから」

「いえ、そんな。——あ、では、他の侍女にも声をかけてよろしいでしょうか。皆、喜ぶと思います」

「喜ぶ？ 本当ですか？」

皆さんの表情が笑顔に変わるのなら、見たいです。

「ぜひ皆さんをお呼びください！」

それでは侍女を呼びに行きます、とアンヌさんが部屋を出たので、私は早速作った刺繍ハンカチを一枚一枚大きなテーブルに並べて準備しておくことにしました。

作った枚数は多く、テーブルの美しい木目をあつという間に覆い尽くします。

皆さん、喜んでくださると嬉しいのですが。

この屋敷に来て初めてワクワクした良い意味での緊張感が生まれます。

——コンコンッ。

「ど、どうぞ」

「失礼いたします」

ノック音とアンヌさんの声に少々震えた声で応答すると、扉がゆっくりと開かれました。

アンヌさんを含め、侍女さんは全部で九人いらっしゃったようです。他にも庭師の奥様がお屋敷にいらっしゃることなので、呼んでいただきました。

侍女さんの中にはまだ経験が浅く、旦那様や私のお部屋に入ることを許されていない若い方もいらして、おそろおそろお部屋に入る方もいますが、熟練の方でも皆さん、

表情が硬いです。それでも集まってくださったということは、ご興味があるからなのでしょう。

「ようこそいらつしやいました。どうぞこちらへ」

私も緊張しておりますが気持ちを奮い立たせて、ハンカチで覆い尽くしたテーブルへ皆さんを笑顔で誘導しました。

皆さんが沈黙のまま、ぐるりとテーブルを囲み、吟味されるお姿はなかなか迫力があります。しかし息を呑む音まで聞こえてしまいそうなくらい部屋はしんと静まり返っているのです、ぐっところえます。

もしかして気に入るハンカチがないのでしょうか。下手……ではないと信じたいのですが。

それでも誰一人動かず沈黙が続くと、段々自信がなくなってきたてしまい、助けを乞うごとくとつさにアンヌさんを見ましたが、彼女は笑顔で頷きます。

私のほうから皆さんへ声をかけなければならぬのだと悟りました。きゅつと握った拳を開いて、手でハンカチを指して口を開きます。

「あ、あの。よろしければお好きなものをお好きだけお取りください。素人が作った拙いものですが」

しかし声をかけても誰一人動こうとはせず、これ以上どういったお声がけをしたらいいのだろうと困惑しそうになっていたところ。

「奥様、ありがとうございます。とても素敵なおハンカチばかりで選ぶのは難しいですが、私はこれを頂きましょうかねえ」

年配の庭師の奥様が、穏やかな笑顔で先陣を切って手を伸ばしてくださいました。そしてそれが合図かのように、一斉に皆がハンカチへと手を伸ばしました。

同時に、ついさっきまで沈黙が続いていた部屋の中でわつと声が上がります。

「じゃあ、私はこれを！」

「ちよつ、待ちなさい！ それ私が狙っていたのよ！ 私のほうが先輩でしょ。遠慮しなさいよ」

「知りませんよ。こんなの早い者勝ちですよ！」

と、一枚のハンカチを巡って小競り合いを始めるお二人。

「……これにしよう」

「果物の刺繍が可愛い。私はこれがいいな」

「この花が綺麗！ あ、でもこっちの小鳥もいい！ あああつ!? こ、このウサギも可愛い！」

狙いを定めて静かに取った方。手に取って穏やかに微笑む方、いろいろ目移りして悩む方。

「何と細かな刺繍。素晴らしい技量ですね」

「売れますよこれ！ 絶対売れる！」

じっくり見つめて褒めてくださる方、目をキラキラさせる方など、場が盛り上がりを見せて私は嬉しくなります。久しぶりに人の明るい声を聞いた気がして、胸が熱くなりました。

そんな中で、威厳ある侍女長さんがパンパンと手を叩くと、一気に場が引き締まりました。

「はい。皆、騒がない。はしたないでしょう。もっと静かに落ち着いて選りなさい。奥様のお部屋ですよ」

「侍女長、何ですよー。ご自分はもう頂いているからって余裕めいちゃって！」

侍女長さんのたしなめる声に一人の侍女さんがからかいの声を上げると、ごほんと咳払いなさいました。

「あ、本当。侍女長のそれ、一番凝ったものですね」

「ええ。私は狙いを定めて静かに、かつ速やかに頂きました」

少し得意げな侍女長さんに私はとうとう噴き出してしまいました。

「失礼いたしました」

「いいえ。わたくしこそ笑ってしまって申し訳ありません。でも、とても嬉しかったのです。いつもは皆さん、澄まし顔の方ばかりだったので、こんなに感情豊かな方々だったのだと分かりとても嬉しく、心から安心しました」

私がそう申しますと、皆さん、もじもじと照れたようなご様子で、また良いほうに印象が変わってきます。アンヌさんのおかげですね。

「アンヌさん、皆さんを連れてきてくださってありがとうございます」

お礼を申しますと、アンヌさんはこちらこそと優しげに微笑んでくださいました。さつきよりもっと自然な笑顔のように思います。

彼女は、サルヴェール侯爵の妻として屋敷に足を踏み入れた私に対してどのように接すればよいのかと、慎重に距離を取って見守っていたのかもしれない。

「あ、あの。リゼット様は刺繍がお得意なのですね。とても上品で綺麗ですの」

おずおずと話しかけてくださる方は、先輩侍女さんからハンカチを勝ち取ったレイナさんとおっしゃる方だそうです。先ほどのご様子を見るに、快活そうな方ですね。

「お褒めいただいて誠にありがとうございます。とても嬉しいお言葉です。刺繍だけで

なく、レース編みなどの手芸もとても好きなのですが、この頃は苦痛になってきていたところだったので」

「え？」

私は思わず本音をもらしながら肩をすくめます。

「誰かにお贈りするわけでもなく、ご披露するわけでもなく、ただ一日という時間を潰すただけに旦那様から素材と道具を渡されたものですから」

うっかりすると嫌いになるところでした。それぐらい誰とも話をせずに、ただ旦那様の指示通り、一人で刺繍を続けていたのです。しかしよく考えれば私自身も行動を起こそうとせず、勝手に侍女さんたちのイメージを作り上げて、壁を作っていたのかもしれない。

「……リゼット様」

声をかけられてはっとし、皆、沈痛な面持ちで私を見つめていることに気付きました。心に寄り添ってくれる優しい方ばかりなのでしょう。結婚式の事情も含め、私が今置かれている状況をご存じの皆さんに、なお心配をかけるような余計なことを言ってしまった、と少し後悔しました。

「申し訳ありません。せっかく盛り上がっておいりましたのに、湿っぽくなってしまいま

したね。ですから皆さん、お好きなだけお取りくださいな。もらっていただけることがわたくしの喜びです。それと実はテーブルに並べきれなかったハンカチもあるのです。ぜひそちらもご覧になっていただきたいです」

「そうなのですか？ では早速並べましょう」

目をきらりと光らせた（ような）侍女長さんがてきぱきと指示なさるものですから、私はまた笑ってしまいました。



「旦那様はたい——」

サルヴェール家の侍従長、オーランドさんはそうおっしゃいました。

サルヴェール家に入り、十日目の朝のことです。

旦那様は、食事はいつもご自分のお部屋で取られているようで、ご一緒したことはありません。

もしかしたら、夜もご自分の居室でお休みになっているのかもしれませんが。寝室では

人の気配を感じたことすらないのですから。

ですが今日こそはと朝が苦手な私が頑張って頑張って早く起き、せめて旦那様をお見送りしようとしたところで、大きな玄関扉がオーランドさんによってボタンと閉じられてしまいました。

私が見えたのは旦那様の後ろ姿だけ。お声をかけることすらできませんでした。

呆然と立つ私に、オーランドさんはいつもと変わらぬ表情で淡々といつもの言葉をかけてこよとなさったので、私は繰り返されてすっかり聞き慣れてしまったその言葉を自分で続けます。

「――大変忙しいお方なのです」

「……そうです」

オーランドさんと同じく感情なく淡々と言った私の口調に少しびつくりなさったご様子でしたが、彼は頷きました。

「旦那様は大変忙しいお方なのです」

「はい」

「大変忙しい。会ってくだらないほど、朝のご挨拶もさせていただけないほど」

お飾りの妻に会う時間はないと。会う意味はないと。多少の愛嬌すら振りまく必要も

ないと。

「……はい？」

「そう、ですか」

――ブチッ。

はい。いいかげん堪忍袋の鎖がブチ切れました。そちらがその気なら、こちらにだって考えがあります。

会いたくない。私に会いに来られることも煩わしい。そうですか。

そちらが会いたくないとお考えならば、会いたくなるようにさせるまでのこと。

――さあ、腕が鳴りますよ！

私は手を組んでパキパキと指を鳴らします。

「あ、あの。リゼット様？」

「はい。何でしょうか」

目が据わっているであろう笑顔でオーランドさんを見つめると、彼は目を睜みはりました。

「い、いえ。失礼いたしました」

「そうですか。ではわたくしはこれで」

踵かかとを返して自分の部屋に戻ると、清掃してくれていたアンヌさんに相談を持ちかけ

ます。

「ねえ。アンヌさん。実は協力していただきたいことがあるのですが」

かねてから密かに考えていた案を耳打ちすると彼女は一瞬目を大きく見開き、にいと唇を横に引いて頷きました。

「旦那様は大変忙しいお方なのでしたよね。では、先にお部屋に下がらせていただきますね」

夕食を済ませた後、オーランドさんに私はそう申しました。

これまでできるだけ遅くまでサロンで旦那様をお待ちしていましたが、自分の部屋に戻ることにします。ここでどれだけ待ったところで、私に会いに足を運ぶことはないでしょうから。

昼間から聞き分けが良くなった私に不気味さを感じたのでしょうか。少し片眉を上げられましたが、彼は問いたすこともなく、お休みなさいませと頭を下げました。

「お休みなさい」

挨拶を残して部屋に戻ってゆっくりと湯浴みした後、アンヌさんに丁寧髪をとかしていただきます。

「アンヌさん、果たして毘にかかるでしょうか」

「そうですね。今日、巢に戻ってくるのなら、かかる可能性は高いかと」

「毘にかかりましたらお呼びいたしますね。調理には人手が必要ですから」

「はい。ぜひ」

アンヌさんは笑顔で頷き、私の就寝の準備を整え退室しました。

気持ち^が昂^{あき}ってまだ眠くなっていない私はと言いますと、本日、旦那様のお部屋に初めて入ったことを改めて思い返します。

旦那様のお部屋が私に与えられた部屋よりも広いというのは予想していましたが、そこは書斎を兼ねた居室、つまり今私がいる寝室とは別の、旦那様用の寝室が隣接しているお部屋でした。

実家の両親は、一つの寝室を共有していましたから、完全に予想外でした。

遅くにお帰りになるのであれば、いえ、遅くお帰りにならなくても、愛してもいない、顔も見たくない名目だけの妻の寝室ではなく、ご自分の寝室でお休みになるのは当然のことです。道理で私の寝室には常に人の気配がなかったわけです。

……それにしても本日は不眠でしょうか。

あるいはこれが失敗としたら、明日以降を考え直す必要があると考えていた——そ

の時です。

「どういふことだ。あれは君の仕わ——」

廊下側の扉がノックもなしにいきなり開かれました。その人物を見た私は深く息を吸うと……

「きゃあああああつ!?」

お腹の底から思いつきり叫びました。

すると耳をつんざくような私の悲鳴に、屋敷の者たちが大きな足音と共に駆けつけてきました。その中には珍しく焦りを見せるオーランドさんや、顔色の変わらない侍女長さん、興味深そうに部屋を覗き込んでいる侍女さんたちの姿もあります。

「何事ですか、奥様！」

「あ、アンヌさん！ 大変です！ 知らない人が部屋に！」

シーツを引き寄せてベッドの端で身を小さくする私に、アンヌさんは扉の入り口に立つ男性の横をすり抜け、一目散に駆け寄ってきて肩を抱いてくれました。何と心強いことでしょう。

「アンヌさん、あの方」

私が指さす人物を見て、アンヌさんはゆっくりと頷きます。

「奥様。落ち着いてくださいませ。あのお方はこの屋敷の主、レオナルド・サルヴェール侯爵。つまり奥様、あなた様の旦那様です」

「……あら？ ま、まあ！」

口に手を当てて、扉の近くに立つ男性に視線を向けました。

「レオナルド・サルヴェール侯爵、なのですか？ それは失礼いたしました。あなた様が旦那様だった………のでしょうか？」

「なっ!? 侵入者呼ばわりしただけでなく、主人の顔も知らないと言うのか」

誰もが認める容姿端麗なお方ですから、ご自分の顔は一度見たら忘れられない顔だと自負されていたとしても何ら不思議ではありません。ですから私は屈辱的に顔を歪めている旦那様に謝罪申し上げることにいたします。社会的マナーを遵守するために為さねばならないことですからね。

私はベッドから下りて床に足をつけます。

「申し訳ありませんでした。結婚前に一度しかお会いしておりませんので、あまり記憶にございませんの。こちらに来てからは一度もお目にかかっておりませんでしたし」

「そん——」

「改めてご挨拶させていただきます。二度目まして、旦那様。手芸を趣味とするリゼッ

ト・クレージュ、いえ、リゼット・サルヴェールと申します。以後、お見知りおきを——させていただきますわね」
私は寝衣の裾を広げてカーテシーをとり、呆氣に取られる旦那様につこりと笑みを向けました。



「ニコラス、これも頼む」

私は部下の机に書類を置いた。

ドスンと重そうな音が響く量だった気がしたが、気にしないことが一番だ。

「ちよっとレオナルド様！ まさかいつものごとく今日中ですか!？」

「ああ」

いつものごとくと分かっていくくせに、なぜ尋ねるのだろうかと思う。まあ、文句の一つも言わないと気が済まないのだろうが。

「勘弁してくださいよ。俺、ひと月前に結婚したばかりなんですよ。新婚なんスよお……」



机の上に山積みされた書類を眺めて、部下のニコラス・アッカーソンは頭を抱えて嘆いた。

普段は明るい彼が「赤みの強い自分の髪は嫌いです」と自嘲していたことがあったなと思い出す。

髪の色も生まれも、本人の努力による結果の能力値に何の影響もしないというのに。しかし周り比べて自分が上だと優劣をつけたがる人間や環境がそうさせるのだろう。自分も含め、人間とは愚かな生き物だ。

「いつもこんなに遅いのですか、お疲れさまですと眉を上げて笑うんですよ、うちの妻は！」

「ほお。良い嫁をもらったな」

「怒っているんですよ！」

横で何やらニコラスが吠えているが、自分の広い机の上にも^{うすたか}堆く積まれた書類の山がある。手早く書類を片付けていこう。

「そうか。それはご苦勞なことだ。ならばさっさとペンを動かすんだな」

「そうじゃなくて！ 仕事量をもっと減らしてくださいってお話ですよ。一日にやるべき量の三、四倍くらいはやっていますよ。特にレオナルド様は侯爵ですよ？ これは

もつと下の者がやる仕事でしょう」

彼は抗議しながらもペンを動かす。

文句を言いながらとは、なかなか器用な男である。だからこそ採用したというところもあるが。

「侯爵とはいえ、若手はそれぐらいやらないと、頭の凝り固まった老害どもは認めない」

そんなやつらに認めてもらわなくても結構と頭の片隅では思うが、自分の功績によって発言力が変わってくる。だから功績を上げる必要がある。

「まあ、父君から侯爵位を引き継いだだけの親の七光りだという自覚がレオナルド様にはあるから、っていうのは分かりますけどねー」

「お前な……。はっきり言うな」

さすがの私もペンを止めて顔を上げ、ニコラスを睨むように目を細めて見つめた。

「はっきり言う俺だから、直属の部下として俺を選んだんでしょ」

「まあ、そうだが」

ニコラスは切れ味が鋭すぎるくらいがあるが、裏表や下心があり身分が上の者に媚びするような人間よりは、ズバズバものを言う人間のほうが気を遣わなくていい。

そういう彼のような者だけを私の部下として選んだ結果、執務室は広さに反して自分とニコラスの二人だけの部屋となっている。

私はそろそろ伸びてきた前髪を掻き上げると、また書類に目を落とした。

「結婚の話だが、女性を選ぶお前の慧眼^{けいがん}が足りなかっただけの話だろう。もっと主人と家に従順な扱いやすい女性を選ぶべきだった」

「何言っているんですか。そんな女性がいるわけないでしょ！ 女性の心は複雑怪奇なものですから！ 特に家庭に入ると女性が変わるものです。結婚をしたことがないレオナルド様が言ったって説得力皆無^{いっしょう}つすよ」

鼻息荒く力説するニコラスを、馬鹿にするためにわざと大きくため息をつく。

「だが私はそういう女性を見つけて選んだ」

「……はい？ 選んだ、とは？」

「つい先日結婚した」

「はあ!? レオナルド様、結婚したんですか!? い、いつ、いつ結婚したんですか!?」
ニコラスはとうとうペンを置いて前のめりに尋ねてくるが、なぜ人のことなのにそんなに気になるのか。人に興味を持てる人間を不思議に思う。

「五日、いや六日前だったか？ もっと前か。まあ、多分それぐらいだ」

「酷い！ 俺、結婚式に呼ばれていませんよ！ 一番の部下を結婚式に呼ばない上司ってどうなんですか!? こんなにもレオナルド様に尽くしているのに」

抗議するニコラスだが、私は気にもせず書類にペンを走らせる。

「人を呼ぶわけがない。あくまでも当人だけの略式のものだ。第一、当日は私も出席していなかったぐらいだからな」

「……………は？ 今、何と？」

ニコラスは一瞬ぼかんとした後、聞いてきたので面倒だが一応答えてやる。

「私も結婚式には出席していないと」

「出席していない……？ レオナルド様ご本人も？」

「ああ」

「ええと。じゃあ、どうやって結婚式を挙げたんですか」

「侍従長に言付けを頼んでおいた。——これ、間違っているな。後で担当に戻しておいてくれ」

訂正が必要な書類を机の端に置く。

あそこの部署は一体どうなっている。毎回毎回、訂正箇所が多すぎだぞ。こんな風に